実施報告

2021 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

齊藤隆仁 [1)]　吉田　博 [2)]　塩川奈々美 [2)]　飯尾　健 [2)]
[1)] 徳島大学教養教育院　[2)] 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では，2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて，FD の体系化，組織化，日常化を推進してきた。2021 年度も 2020 年度に引き続き，新型コロナウイルス感染症の影響を受け，ほとんどのプログラムをオンラインで実施した。2021 年度はコロナ禍 2 年目であることから，オンライン授業に関する工夫や実践事例が蓄積されており，「授業について考えるランチセミナー」，「授業設計ワークショップ」では，オンライン授業ですぐに活用できる教育方法やツールを紹介した。「大学教育カンファレンス in 徳島」，「授業について考えるランチセミナー」はオンラインで学外に公開することで，学外からの参加が多数あった。本年度実施した各プログラムの概要を記載し，アンケート結果等からうかがえる成果と今後の課題について考察する。
（キーワード：教育の質保証，教育力開発コース，授業について考えるランチセミナー，オンライン研修）

2021 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Takahito SAITO[1)]　Hiroshi YOSHIDA[2)]　Nanami SHIOKAWA[2)]　Ken IIO[2)]
[1)] Institute of Liberal arts and Sciences, Tokushima University
[2)] Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and routinization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion program since FY2002. In FY2021, most of the programs were conducted online due to the novel coronavirus (COVID-19) pandemic as in FY2020. However, there were many innovative and practical examples regarding online teaching methods based on the experiences of online teachings in the pandemic of COVID-19 during the last year. We have conducted a series of seminars entitled “Lunch Seminar on Thinking about Classes” and the program for new faculty called “Class Design Workshop” to introduce educational methods and tools that can be used immediately in online classes. The "University Education Conference in Tokushima" and the " Lunch Seminar on Thinking about Classes " were open to the public online and attracted many participants from outside the university. An overview of each program conducted in this year, and discussions about challenges for the future based on the results of the questionnaire are described.

(Keywords: quality of education, Educational Development Course, Lunch Seminar on Thinking about Classes, online training)

1. はじめに

2021年度は，2020年からの新型コロナウイルス感染症が終息せず，オンライン授業が当たり前の年となった。2021年10月に実施した第4回 教員の教育に対する意識調査（ティーチングライフ）においては，オンライン授業が負担であるという声が数多く聞かれた。オンライン授業などに対する教育方法・ツールを紹介する機会の提供はさらに重要となり，2021年度の全学FD推進プログラムにおいてもそうしたプログラムを数多く実施した。今年度の実施報告においては，自らの抱える具体的な課題を解決するという問題意識をもって参加した教員が多数存在したことがアンケート結果などから伺える。

これまで大学教員が当たり前と思って実施してきた対面授業を単にオンラインで行うという小手先での対応ではなく，そもそも学生が何を学ぶのか，学部や大学として何を学修してほしいと考えているのかを改めて議論する場として，全学FD推進プログラムの果たす役割は大きいと考える。オンライン授業の普及は，教育のDX（Digital Transformation）化にもつながることから，新たな教育改革を推進していくための議論を加速させること，各学部・学科における教育プログラムの質保証においてもFDに期待されるところが大きい。

以下，今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。　（齊藤隆仁）

2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために，徳島大学教育担当理事と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門は，大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について，意見交換を行い，具体的な教育改革の取組について提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD（教育改革 FD）として位置づけており，教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。2021 年度は，本学が 2022 年度からの実施に向けて検討を進めている，教学アンケートの改革（アンケートの統合，質問項目の見直しや統廃合，実施体制の見直し等）を主なテーマとして議論，意見交換を行った（表 1）。

2020 年度より議論を進めてきた教学アンケートの改革について，4 月 14 日に開催された学長企画会議において，高等教育研究センターと教育戦略室が連携して検討することが決定された。この決定を受け，複数のアンケートにおける共通設問を検討するワーキンググループが立ち上がり，各アンケートの実施を担当する委員会において，全学共通の統一の設問案の検討を開始した。教育改革推進部門では，ワーキンググループで検討すべき事項の整理や議論を支援し，各アンケートの設問案の作成についても各委員会等の支援を行い，教育担当理事と進捗状況の共有を随時行うなど，本アンケート改革に対して主導的に取組を進めた。これらの取組により，2022 年度より新しい実施体制で教学アンケートが実施できる準備が整い，12 月 15 日の学長企画会議，12 月 21 日の教育研究評議会，12 月 22 日の役員会で報告，決定された。

表 1　教育改革に関する勉強会・意見交換

回	実施日	内容
1	5 月 13 日	・全学 FD 推進プログラム ・教学アンケートの改革について ・徳島大学におけるポストコロナを見据えた教育改革
2	6 月 15 日	・教学アンケートの改革について
3	7 月 30 日	・教学アンケートの改革について
4	8 月 17 日	・授業設計ワークショップの概要
5	9 月 3 日	・教学アンケートの改革について ・大学教育カンファレンス in 徳島
6	10 月 14 日	・教学アンケートの改革について
7	12 月 10 日	・教学アンケートの改革について
8	2 月 25 日	・教員の教育に対する意識調査結果 ・2022 年度の FD 実施計画

場所：理事（教育担当）室〔本部庁舎 3 階〕

教育改革 FD を通して，教育改革推進部門では，高等教育開発の専門的立場から，本学が取組むべき教育改革を支援するとともに，教育の内部質保証を推進している。近年の大学教育においては，教学マネジメントの確立が強く求められており，教学 IR を機能させるための取組も必要であることに加えて，アフターコロナを見据えた教育の在り方を検討することも重要である。

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革，教育の内部質保証に関わる取組を通じて，学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。　（吉田　博）

3. 教育の質保証FD

3.1　ねらい・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ，学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では，「プログラム評価・改善実施手順」を定め，教育プログラムの評価・改善を進めるうえでの体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても，教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき，実質的に実施していくことが強く求められており，徳島大学でも実態を把握し，全学的な支援及び情報提供，組織間の連携等を進めることが必要であるといえる。2020 年度には，各学部等のプログラム評価委員会を対象に，教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握するための調査を実施した。その結果，プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること，技能領域や態度領域も含めて客観的に評価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが，多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。

これらの背景のもと，各学部等の教育プログラムの評価・改善について，客観的な指標に基づいた透明性のある評価，改善の計画を作成することを目的とした教育の質保証 FD を計画した。2021 年度は，実施希望のあった薬学部及び歯学部において実施した。

3.2　概要

FD の具体的な内容は,高等教育研究センター教育改革推進部門教員と学部等の教育プログラム評価に関わる担当者が，プログラム評価の取組を確認し，当該学部等が目指す取組の実現に向けて課題や対応策等を検討する。打ち合わせを重ねながら，部門スタッフが必要な情報を提供し，当該学部等の背景に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成するものである。2020 年度より実施希望のあった薬学部に加え，2021 年度からは歯学部においても実施し，以下の日程で担当者と打ち合わせを行った。

■薬学部

●2021 年 5 月 21 日（金）

場所：薬学部棟 2 階多目的室

参加者：小暮健太朗，酒池久美子

教育プログラム評価について，その意義や具体的な方法を共有し，現在薬学部で実施している教育プログラム評価の実施状況や課題について意見交換を行った。今後は，持続可能な最小限の取組で教育プログラムを評価できる仕組みを模索していくことを確認した。

■歯学部

●2021 年 6 月 17 日（木）

場所：歯学部学部長室

参加者：日野出大輔，河野文昭，坂口幸久，加藤美幸

●2021 年 10 月 8 日（金）

場所：歯学部第 1 会議室

参加者：日野出大輔，河野文昭，加藤美幸

●2022 年 2 月 9 日（水）

場所：歯学部第 1 会議室

参加者：日野出大輔，河野文昭，加藤美幸

教育プログラム評価について，その意義や具体的な方法を共有し，現在歯学部で実施している教育プログラム評価の実施状況や課題について意見交換を行った。特に，プログラム評価を行う上で重要な指標の 1 つとなる学生の学習成果を可視化・測定するためのアセスメント計画「カリキュラムアセスメントチェックリスト（以下, CACL）」の作成を行った。具体的には，歯学部 FD プログラムとして「歯学部・大学院口腔科学研究科教育プログラム評価のためのワークショップ」を開催し，教務委員会委員，プログラム評価委員会委員が，歯学科，口腔保健学科，口腔科学専攻の 3 つの教育プログラムごとにグループに分かれて, CACL を作成した（図 1）。ワークショップで作成した CACL をデータ化し，2022 年度は作成した CACL を使って，各教育プログラムにおける学生の学習成果を評価する予定である（図 2）。

◆歯学部・大学院口腔科学研究科教育プログラム評価のためのワークショップ

日時：第 1 回 11 月 26 日（金）17：00〜18：30
　　第 2 回 12 月 10 日（金）17：00〜18：30

場所：歯学部棟講堂

参加者：歯学部・大学院口腔科学研究科　教務委員会委員，プログラム評価委員会委員

3.3　成果と課題

教育プログラムの評価について，希望があった2つの学部で打ち合わせを実施することができ，歯学部では，2022年度に実際に活用するCACLを作成することができた。特に，CACLの作成過程において，歯学部の教務委員会委員，プログラム評価委員会委員が集まり，ワークショップを通して，教育プログラム評価に対して意見交換を行いながら作業を進めたことで，歯学部における教育プログラムの現状や課題に対する共通認識を持つことができた。これは，実際に教育プログラム評価を行い，今後の改善につなげていくためには極めて重要なことである。教育プログラム評価においては，CACLのようなツールを作成するという作業のみに焦点があてられると，改善につながりにくく，ただ評価を行うという負担感のみが残されてしまう。歯学部のように関係者で意見交換を行いながら共通認識を持ち，CACLを作成したこ

図 1　歯学部・大学院口腔科学研究科教育プログラム評価のためのワークショップの様子

カリキュラム・アセスメント・チェックリスト　　**歯学部・歯学科**

番号	①評価資料	②実施時期	③実施頻度	④対象者	⑤手法	⑥評価の視点・基準	⑦評価者	⑧プログラム評価の責任者	⑨測定したい項目								⑩評価結果	⑪結果の活用方法
									CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	学生の要望		
1	早期体験 チーム医療入門 SIH道場 IPE	前期	年1回	1年生 4年生	レポート 座学・演習		教員		○		○		○	○		○	■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
2	歯科英語 交換プログラム3～6	2年と6年　1回 随時		2年生 6年生	試験 プレゼンテーション		教員								○ ○		■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
3	研究基礎ゼミ 6年生ゼミ		年1回 随時	3年生 6年生	実験ノート提出 学会発表（任意） 実験ノート任意提出 ゼミ生と頻繁にコミュニケーション		教務委員会 教員							○	○	○	■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
4	OSCE CBT		年1回	4年生 （5年生）	実習試験 試験（コンピュータ）		共用試験実施機構			○	○	○					■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
5	臨床実習1・2　試験（知識） Post-CC PX	4年後期 5年前期	毎週 年1回	4,5,6年生 5年生	ポートフォリオ 実習試験		担当教員 機構／厚労省		○	○	○	○	○				■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
6	国家試験 CC1/2/4/5/7	6年次末	年1回	6年生	試験		厚労省		○	○		○	○				■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
7	外部国試模試				試験												■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
8	卒業時アンケート ラーニングライフアンケート 学部長・担任とのメンター懇談会	卒業時	年1回	6年生 各学年	アンケート 面談		自己評価									○	■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	
9	定期試験	各学期末		各学年	筆記試験 レポート課題		各授業担当教員		○	○	○	○	○	○	○		■各評価項目③に対する評価 ■具体的な成績等のデータ（平均、分布など） ■学生の様子・態度 ■添付資料・根拠資料 ■総評・その他の事項	

図 2　ワークショップにおいて作成した CACL（歯学部・歯学科）

とは，徳島大学の他の学部にも活かすことができる先駆的な取組となったと言える。また，今回，歯学部において多くの関係者が関わり，ワークショップが実現できた理由には，歯学部の担当者である日野出教授，河野教授，運営の支援をしてくれた歯学部学務係の職員の尽力が不可欠であったといえる。

2022 年度は，歯学部においては作成した CACL を活用して評価を行う予定である。また，他の学部等においても，同様の取組あるいは当該学部等の実態に合わせた教育プログラム評価，改善に関する支援を継続して行う予定であり，FD 委員会等で歯学部の取組を共有するなどして，実施希望を募る予定である。　（吉田　博）

4. 教育力開発コース

教育力開発コースは，授業設計，授業の実施・改善，教育活動を振り返り，自身の目標を明確にし，改善につなげるといった一点のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており，学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員，及び，学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象に実施している。対象者は，まずステップ 1 とし

て「授業設計ワークショップ」を受講した後，ステップ 2 として「授業実践の振り返り」，または「授業参観・授業研究会」のいずれかを選択し受講することと定めている。これらのステップ 1 および 2 は必ず受講することが定められているが，加えてこれらのプログラムを受講後 3 年以内に，ステップ 3 である「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとしている。

4.1　授業設計ワークショップ

4.1.1　目的

授業設計ワークショップは，授業設計とアクティブ・ラーニングの手法について学び，模擬授業・授業検討会を行うことで，実践的に知識やスキルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の 4 つである。

① FD 活動の理念，活動計画を理解することができる。
② 授業を計画，実施し，評価する方法を体得することができる。
③ 授業研究の仕方を理解し，実践することができる。
④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

2017 年度からは参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する，反転授業形式を導入している。また，2021 年度は 2020 年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大に伴い，当初対面研修として予定していた内容を，Zoom を活用したオンライン形式で実施した。

4.1.2　概要

■開催日程

2021 年 8 月 19 日（木）・20 日（金）

■会場

Zoom（オンライン）

■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）へ開放しているが，2021 年度は 2020 年度に引き続き，新型コロナウイルス感染症拡大に伴い学内の対象者限定で実施した。

学内の対象者は，教育力開発コースの対象者，2020 年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者，推薦を受けた者（助教及び，教授等）としている。ただし，病院及び，プロジェクト採用等の場合は除いた。また，①学外で同様の研修を受けた場合，②担当する授業がない場合，③診療業務を主に担当している場合，についても参加を免除した。

■参加者

2021 年度の参加者は教員 15 名（徳島大学のみ）であり，詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏名	所属	職名
山口　博史	総合科学部	准教授
駒　　貴明	医　学　部	准教授
髙尾正一郎	医　学　部	准教授
中本真理子	医　学　部	講　師
長谷川敬展	歯　学　部	講　師
毛利　安宏	歯　学　部	講　師
渡辺　朱理	歯　学　部	講　師
荒川　幸弘	理 工 学 部	准教授
松本　和幸	理 工 学 部	准教授
南　　康夫	理 工 学 部	准教授
八木下史敏	理 工 学 部	准教授
川上　烈生	理 工 学 部	講　師
平田　真樹	生物資源産業学部	講　師
森田　椋也	人と地域共創センター	講　師

■運営メンバー

運営メンバーは，教育担当理事，FD 委員会委員長，FD 委員会委員を含めた教員 10 名，教育支援課職員 3 名の計 13 名であり，詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
河村　保彦		理　事
齊藤　隆仁	教養教育院	副理事
常山　幸一	医　学　部	教　授
友竹　正人	医　学　部	教　授
日野出大輔	歯　学　部	教　授
柏田　良樹	薬　学　部	教　授
鎌田　磨人	理 工 学 部	教　授
吉田　　博	高等教育研究センター	准教授

飯尾　　健	高等教育研究センター	助　教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助　教
川野　晋資	学務部教育支援課	教育企画室長
齋藤　京子	学務部教育支援課	専門職員
伊藤　典子	学務部教育支援課	事務補佐員

■内容

2 日間にわたり，表 2 の通りプログラムを実施した。実施にあたっては対面形式とオンライン形式の 2 通りを計画し，8 月 2 日時点における常三島地区の BCP レベルが 3A 以上の場合は，同期型オンライン（Zoom）で実施することとしていた。そこで，8 月 2 日時点では BCP レベルが 1 であったため対面形式のワークショップを実施する予定で準備を進めていたが，8 月 11 日に常三島地区の BCP レベルが 3A に引き上げられたため，急遽オンラインでの実施を決定した。

■全体の流れ

［1 日目］

「(1) オリエンテーション」では，大学教育改革の流れや，本学の教育改革について説明を行った。とくに，今年度は 2020 年度からのオンライン授業が実施されたこともあり，オンライン授業が一般化した今こそ授業設計について気を付けるべき点を，学生の意見を交えて紹介した。続いて，授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し，昨年度の参加者の声を紹介して，参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では，参加者同士がお互いについて知ることができるように，Zoom のブレイクアウトルームを活用して実施した。

「(3) ワーク 授業設計の基本」では，事前にビデオ教材による講義「アクティブ・ラーニング」と「学習評価の仕方」を視聴した上で参加する，反転授業形式で実施した。教育改革推進部門のホームページで講義ビデオを公開し，同時に簡単なクイズに取組むことができるようにした。

ワークでは，これらの動画を踏まえそれぞれグループごとに異なるテーマでディスカッションを行った。ディスカッションでは Google Jamboard を用いて意見をまとめ，最後に作成した Jamboard を全員で見ながらディスカッションの内容を共有し，質疑を行った。

「(4) ワーク 自身の教育理念」では，教育活動を行う上で，それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら，教育理念を意識することの大切さを説明し，「ティーチング・ポートフォリオ作

表 2　授業設計ワークショッププログラム

授業設計ワークショップ日程（第１日目）

時　刻	内　　容	講師・担当者	備　考
12：30－12：50	・受付（地域創生国際交流会館フューチャーセンター） ※12:45 までにお集りください		
12：50－13：30	（1）オリエンテーション ・はじめに（副学長より挨拶） ・大学教育改革の流れ ・教育の内部質保証方針 ・研修のねらいと意義	吉田 博（進行） 副学長(教育担当) 河村保彦 ＦＤ委員会委員長 齋藤隆仁	Zoom ミーティングへ参加
13：30－13：50	（2）アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	塩川奈々美	Zoom ミーティングへ参加
13：50－14：00	休憩		
14：00－15：00	（3）ワーク「授業設計の基本」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・成績評価の意義・方法 ・学生の学習を促す授業方法	飯尾 健	Zoom ミーティングへ参加
15：00－15：10	休憩		
15：10－16：10	（4）ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること	吉田 博	Zoom ミーティングへ参加
16：10－16：20	休憩		
16：20－17：45	（5）講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	塩川奈々美 スタッフ全員	Zoom ミーティングへ参加

授業設計ワークショップ日程（第２日目）

時　刻	内　　容	講師・担当者	備考
9：00－9：30	・集合、模擬授業準備 （教材印刷が必要な場合は 9:00 集合）	スタッフ	Zoom ミーティングへ参加
9：30－12：00	（6）模擬授業実施（グループで実施） ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】（1 人 30 分×4 人（休憩適宜）） ・シラバス・授業計画書等の紹介（5 分） ・模擬授業の実施（15 分） ・授業検討会（10 分） →チェックリストをもとによかった点、改善点等を検討する。	各班司会：FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員	各グループの Zoom ミーティングへ参加
12：00－13：00	休憩　　各自で昼食		
13：00－13：40	（7）模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	吉田 博	Zoom ミーティングへ参加
13：40－14：10	（8）教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	飯尾 健	Zoom ミーティングへ参加
14：10－14：40	（9）プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田 博（進行） 副学長(教育担当) 河村保彦 ＦＤ委員会副委員長 柏田良樹	Zoom ミーティングへ参加

成ワークショップ」の紹介と教育理念を整理するためのミニワークを行った。また，ミニワークの結果は Zoom のブレイクアウトルームを活用し，グループ内での共有を行った。

「(5) 講義・ワーク 授業計画」では，シラバスや授業計画書の書き方について説明があり，徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され，目標設定の仕方や，その記述方法が解説された。続いて，これまでの講義やワークを踏まえて，参加者があらかじめ作成したシラバス，授業計画書の検討・修正を行った。その後，Zoom のブレイクアウトルームを活用し，参加者がペアでシラバスを交換して相互チェックを行った。

［2 日目］

「(6) 模擬授業実施（グループで実施）」では，参加者や運営メンバーがグループごとに各アカウント（Zoom ; 4 アカウント）に分かれて，参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員，高等教育研究センター教育改革推進部門の教員がコンサルタントや司会者として入り，支援を行った。はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し，その中からある一部分の 15 分間を切り取り，その模擬授業を実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加した。その後，授業検討会を行い，参加者がお互いに良い点，改善点について話し合いながら，授業を良くするために取組むことなどを話し合った。

「(7) 模擬授業の振り返り」では，模擬授業に対する全体的なコメントがあり，その後参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し，グループのメンバーからもらった意見をまとめ，今後のアクションプランを作成した。その後，Zoom のブレイクアウトルームを活用し，グループ内で共有を行った。最後に，数名の参加者から，研修で学んだことやアクションプランを紹介してもらい，全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では，《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》⇒《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では，ワークショップ全体に対する講評があり，終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書の授与については，後日学内便にて参加者に送付した。

4.1.3 アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 15 名を対象にアンケートを実施し，参加者全員から回答を得た。図 3 にアンケート結果の一部を示している。また，自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

■現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

・ シラバス執筆の上での留意点への確認・理解
・ 受講者のレベルに応じた柔軟な授業設計

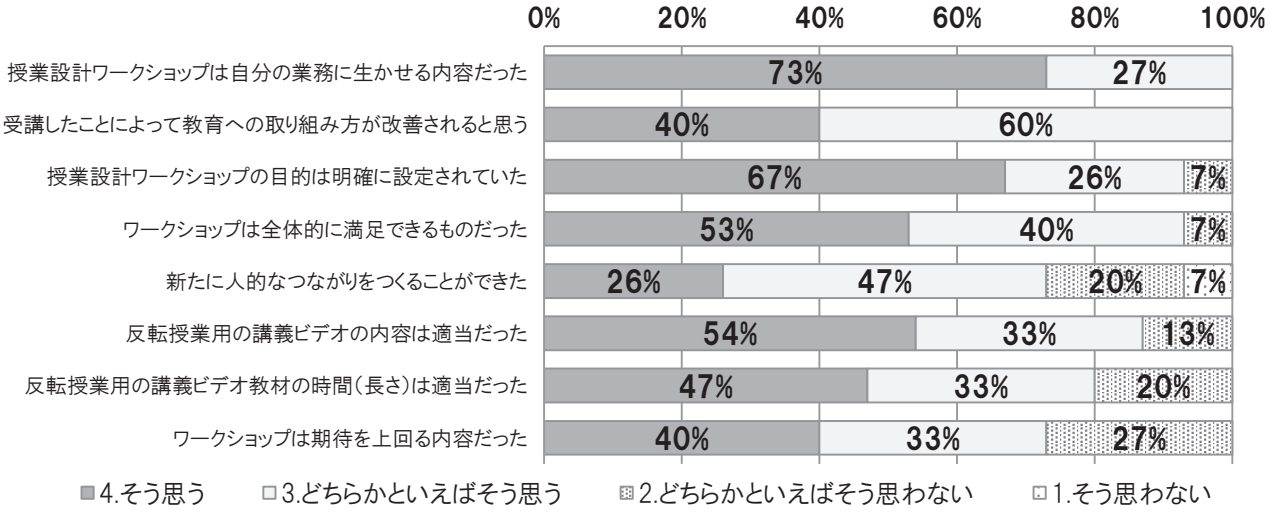

図 3 授業設計ワークショップアンケート結果（n=15）

・　講義中に学生に自分で考えさせるような講義設計を行うこと
・　スライド作成能力
・　オンラインでの講義テクニック
・　学生を引き付けるような理解が深まるような話術
・　多人数学生との対話的な授業スキル
・　講義内での学生との関わり方（声かけ等）
・　学生の提出物に対して適切にフィードバックを行うこと

■参加して良かったと思われる点を，具体的にお書きください。

・　いくつかのオンラインツールの活用法を知ることができた
・　授業設計の重要性がよく理解できた
・　教員としての理念を言語化してみることができた
・　他学部の先生方の考え方や講義の工夫を知ることができた
・　自身の改善点に気づかされた
・　シラバス等の添削を受けられた
・　他の人に客観的に自分の講義を見てもらえて参考になった
・　自分が不安に思っているところがみなさんの意見で解消された
・　授業実施の際の悩み事や改善点などを共有できた

■研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば，具体的にお書きください。

・　作成したファイルをどこかにアップロードし，時間をとって参加者に書き込みを促し，テキストベースのコメントを得られるとありがたい
・　シラバス作成やオンライン講義の方法や Tips などについて短時間での動画がいつでも見られる環境を作ってほしい
・　最初の自己紹介やグループワークの時間が短く，全員の話が聞けなかったり，議論が十分にできず残念だった。グループ内での進行を誰が進めるかについても時間がかかったので，時間配分やグループ内での時間配分を最初に決めたほうがよいと思う
・　グループでのアイスブレイクであまり打ち解けられなかった気がする。内容等に工夫が必要

■その他，お気づきの点があればお書きください。

・　現在教授になっている方こそ受けるべきワークショップだと思う
・　二日間は長いように思った
・　録音・録画を受けることが極度に苦手なため，そういう人もいることを把握しておいてほしい
・　質問したいけどあまりできなかったので，自分の授業でもどのような形で質問が出来る環境を設計するかを考えたい
・　これまで使ったことのないツールを利用してワークをする経験ができたので，授業にも活用したい

4.1.4　成果と課題

今回のアンケート結果から，「授業設計ワークショップは自分の業務に生かせる内容だった」「受講したことによって教育への取組み方が改善されると思う」という設問において，全ての回答者から肯定的な回答が寄せられたほか，「授業設計ワークショップの目的は明確に設定されていた」「ワークショップは全体的に満足できるものだった」の設問でもほぼ全員から肯定的な回答が得られた。また自由記述からも，授業設計の重要性が理解できたこと，他の教員の実践を見ることで参考としたり，自身のシラバスや授業実践へのコメントが得られた点が有用であった点が挙げられた。

これらのことから，本ワークショップの目標として掲げられている 4 点について，参加者はおおむね達成できたと考えられる。とくに，参加者同士によるシラバス・授業計画書の添削や模擬授業の実施・参加により，他の教員の実践や考え方に接し，自身の授業について違った視点で考える契機となったことが，自由記述からも伺える。また講師側が積極的にオンラインツールを利用することで参加者がツールの使い方に触れる機会となったと共に，参加者側が利用しているオンラインツールについて参加者のみならず運営側も共有することができた点で，参加者・運営側ともに意義が

あったと言える。

一方で課題として，まずオンラインツールの利用法についての説明やツールの設定に予想以上の時間を要する場面が見られ，そのためグループワークやディスカッションの時間が十分に確保できなかった点が挙げられる。さらにアンケート結果からも見られるように，「人的なつながり」，すなわち今回のワークショップだけでなく継続的に授業や教育について相談したり意見交換ができる関係を構築・維持することは，昨年に引き続いての課題となっている。また，アンケートの「反転授業用の講義ビデオの内容は適当だった」「転授業用の反転授業用の講義ビデオ教材の時間（長さ）は適当だった」の項目について，やや肯定的でない回答が寄せられている。加えて「ワークショップは期待を上回る内容だった」についても，およそ 3 割が肯定的でない回答を行っていることから，反転授業用の講義ビデオを含め，ワークショップの内容について，オンライン授業を踏まえて改善を行う必要がある。

次年度の実施形式は未定であるが，今回得られた成果と課題を活かし，より効果的な内容で，かつ効率的にワークショップを計画・実施することが求められる。（飯尾　健）

4.2　授業実践の振り返り

4.2.1　目的

授業実践の振り返りは，日常的な授業における実践を振り返ることで，授業の設計・実施の見直し及び改善までの取組を支援するものである。教育力開発コースの対象者は，授業設計ワークショップの次に受講するプログラムであり，ワークショップで修得した内容を実践で活かすためのものである。

4.2.2　概要

対象者は，自身が担当する授業のうち，ある 1 日の授業を 1 つ設定し，その授業の「①シラバス」，その日の「②授業計画書」を準備する。続いて，学生アンケート（指定様式）を実施し，アンケート結果を踏まえて，「③授業実践の振り返りシート」を作成する（図 4）。

対象者が作成した①②③の資料を基に，所属学部の FD 委員長が授業における計画，実施，評価，改善のプロセスが実践できているか否かの確認を行う。その後，全学の FD 委員会において，「③授業実践の振り返りシート」の内容について確認し，問題がない場合に承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了とする。

教育力開発コース「授業実践の振り返りシート」　　作成者：＿＿＿学部 氏名＿＿＿＿＿ 授業名＿＿＿＿＿＿＿＿

◆作成した「シラバス」、「授業計画書」、実施した「学生アンケート」の結果を見ながら当てはまる☐に✔を記入してください。

項目	自己診断	FD 委員確認欄	実践の振り返り・学生の意見を踏まえての感想・改善すべき点など	教育改革推進部門に相談したいこと
1.授業設計 作成したシラバスについて	**授業の目的について**			
	☐学位授与の方針（DP：ディプロマポリシー）と授業との関連が記載されている	☐		
	☐学生を主語として記載されている	☐		
	☐授業が DP を達成するためになぜ必要であるかの存在意義が記載されている	☐		
	授業の概要について			
	☐学部，または学科のカリキュラム上の位置づけが記載されている	☐		
	☐授業の実施形式、アクティブ・ラーニングの実施などの授業方法が記載されている	☐		
	授業の到達目標について			
	☐学生を主語として記載されている	☐		
	☐学生が身に付けることができる能力を、学生自身がイメージできるように具体的に記載されている	☐		
	☐目標を一つ一つ独立させて記載されている（一つの文に一つの目標が記載されている）	☐		
	☐目標を表わす動詞は観察可能な行動で記載されている	☐		
	授業計画について			
	☐目的・目標との整合性がとれている	☐		
	☐授業時間外にどのような事前・事後学習をするのかが具体的に記載されている	☐		
	成績評価方法・基準について			
	☐評価の機会や方法は複数で記載されている	☐		
	☐評価の方法と期限、実施時期が記載されている	☐		
	☐評価の配分割合が記載されている	☐		
	☐評価の基準が記載されている	☐		
2.授業実施 作成した授業計画書について	**授業の到達目標について**			
	☐1 回分の授業で達成可能な数の目標が具体的に記載されている	☐		
	☐目標を一つ一つ独立させて記載されている（一つの文に一つの目標が記載されている）	☐		
	☐目標を表わす動詞は観察可能な行動で記載されている	☐		
	授業計画について			
	☐導入・展開・まとめで構成されている	☐		
	☐口頭での説明だけでなく、必要に応じて、板書・スライド・教科書・教材などを活用している	☐		
	☐終始一方向的な解説のみで終えるのではなく、学生の能動的な思考や参加を促す工夫がなされている	☐		
3.授業評価・改善 実施した学生アンケートについて	**学生の把握について**			
	☐学生の授業に対する理解度（学生の自己評価）を把握することができた	☐		
	☐学生が授業で学んだこと、身に付けたことを把握することができた	☐		
	☐学生の授業に対する要望や意見を把握することができた	☐		

4.FD 委員の承認	授業における授業における計画、実施、評価、改善のプロセス評価ができている☐	<FD 委員からのコメント>	<FD 委員署名> （　　）学部 FD 委員長

※授業実践の振り返りの際に使用する「シラバス」、「授業計画書」は**教育力開発コースのみで使用する**ため、実際の授業のシラバス等を適切に修正しても問題ありません。ここで**修正したシラバスを作成者及び学生に開示することはありません**。
※シートの記載において不明な点や、どのような改善が望ましいか、どのような改善方法があるかなどの**お問い合わせは、教育改革推進部門まで**ご連絡ください。

図 4　授業実践の振り返りシート

4.2.3　実施報告

2021 年度は表 3 の通り，23 名の教員が実施し，全員が FD 委員会において承認を受けた。2021 年度からは，「授業実践の振り返り」または「授業参観・授業研究会」のいずれかを選択できるようになったことで，これまで「授業参観・授業研究会」には取り掛かりにくいと感じていた教員にも，授業実践の振り返りを取組んでいただけるようになった。書面での振り返りという点で授業参観・授業研究会のように実際に FD 担当者が授業の様子を見て，対面で議論する場が持てるわけではないものの，この方法を選択した教員は振り返りシートの評価視点に即した省察を行い，FD 担当者との密に連携し取組んでいただいた。FD 担当者としてもこうした先生方の姿勢に応えるべく，次年度も支援を行っていきたい。　（塩川奈々美）

4.3　授業参観・授業研究会

4.3.1　目的

授業参観・授業研究会は，個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD を目指しており，授業の把握，授業の改善，参加者間での授業技術の共有を目的としている。

4.3.2　概要

授業参観・授業研究会は，はじめに対象教員の授業を参観し，授業の様子を撮影・録画し，学生アンケート（授業の理解度，良かった点，改善して欲しい点，先生へのメッセージを問う）を実施する。この授業参観・授業研究会は学部 FD との共催となるため，全学案内を出すことで対象教員所属学部内外からの参観者・研究会参加者が集まる場合もある。授業参観の際には高等教育研究セ

表 3　授業実践の振り返り修了者

承認日	学部・学科等	氏名	授業名	評価者（FD 委員）
4 月 13 日	理 工 学 部	光原　弘幸	オペレーティングシステム	長谷崎　和洋（理工学部）
4 月 13 日	理 工 学 部	柳谷 伸一郎	レーザー計測	長谷崎　和洋（理工学部）
6 月 8 日	医学部・医学科	西田　憲生	生理学	常山　幸一（医学部）
7 月 13 日	総合科学部	河田　和子	日本近現代の幻想小説	桑原　恵（総合科学部）
7 月 13 日	医学部・医学科	桑野　由紀	生理学（I・II）	常山　幸一（医学部）
9 月 14 日	医学部・医学科	石澤　有紀	薬理学	常山　幸一（医学部）
9 月 14 日	医学部・医学科	高須　千絵	私，その存在と未来：ダイバーシティ	常山　幸一（医学部）
9 月 14 日	医学部・医学科	尾矢　剛志	病理学I	常山　幸一（医学部）
9 月 14 日	医学部・保健学科	山下　理子	病理学I	友竹　正人（保健学科）
10 月 12 日	医学部・医学科	釜野　桜子	予防医学	常山　幸一（医学部）
10 月 12 日	医学部・医学科	駒　貴明	ウイルス学	常山　幸一（医学部）
10 月 12 日	医学部・保健学科	田中　祐子	健康相談活動	友竹　正人（保健学科）
11 月 9 日	医学部・保健学科	安藝　健作	臨床血液学II	友竹　正人（保健学科）
12 月 14 日	総合科学部	横谷　謙次	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	桑原　恵（総合科学部）
12 月 14 日	医学部・医学科	森根　裕二	臨床実習入門：漢方医学	常山　幸一（医学部）
12 月 14 日	歯　学　部	長谷川 敬展	生理学 AB 講義	日野出　大輔（歯学部）
1 月 11 日	理 工 学 部	松本　和幸	情報科学入門	鎌田　磨人（理工学部）
1 月 11 日	教養教育院	内山　八郎	主題別英語	岩田　貴（教養教育院）
2 月 8 日	理 工 学 部	山本　祐平	無機化学 1	鎌田　磨人（理工学部）
2 月 8 日	理 工 学 部	荒川　幸弘	有機化学演習	鎌田　磨人（理工学部）
2 月 8 日	歯　学　部	毛利　安宏	薬理学 CD	日野出　大輔（歯学部）
3 月 8 日	医学部・医科栄養学科	中本 真理子	給食栄養管理論	瀬川　博子（医科栄養学科）
3 月 8 日	理 工 学 部	南　康夫	光デバイス	鎌田　磨人（理工学部）

※4 月 13 日承認の修了者は 2020 年度に「授業実践の振り返り」を実施した対象者である。

ンター教育改革推進部門の教員は，授業のポイントや気になる点などを記録する（授業内容のまとまり，時間経過，特筆するべき発言や出来事など）。授業参観終了後，続いて授業研究会を実施する（対象教員の都合により別日に実施される場合もある）。ここでは，対象教員と授業を参観した教員が，授業内容について議論を行う。この中で授業の様子を振り返りつつ，学生アンケートの結果を確認し，うまくいっている点や工夫されている点を共有し，困っている点を解決するためのアイディアについて意見交換を行う。

4.3.3　実施報告

2020 年度より，新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受け，多くの授業がオンラインで実施された。2021 年度もまた同様に，クラスター（集団）感染が起こりやすい，密閉空間，密集場所，密接場面（3 密）を避けることが求められる中での実施となった。2021 年度の修了者は表 4 の通りである。

2021 年度の授業参観・授業研究会は全てオンラインで行われたが，対象教員もスライド資料に書き込みをしながら解説を行ったり，Zoom のブレイクアウトルーム機能等を活用したりするなどオンラインならではの方法で授業を実施する創意工夫が見られた。

この授業参観・授業研究会においては，FD 担当教員を中心に様々な教員が自身の授業を見に来るという方法についてプレッシャーを感じるとする声が聞かれる。しかし，その実態として，参観後の授業研究会では，参観した教員から授業の良かった点・工夫されている点について肯定的な評価を受けるほか，普段の授業について抱える悩みを相談したり，他の教員からの助言を受けたりできる場にもなるため，授業研究会終了後には対象教員から「大変参考になった」とコメントを頂くことが多い。今後も対象教員に授業参観・授業研究会を選択してもらえるよう，さらに充実した授業参観・授業研究会が実施できるよう努めたい。

（塩川奈々美）

4.4　ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（TPWS）

4.4.1　背景

徳島大学では 2011 年度より実質的な FD の取組を進めるため，「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（以下，TPWS）」を開催している。2017 年度までに合わせて 27 名が TPWS に参加した。参加者の満足度は非常に高く，教育改善に有効的であることが示されているが，例年参加者が少ないことが課題とされている。

参加者が少ない要因の 1 つに，TPWS が連続した 3 日間のワークショップであることから，参加する時間を確保できない，参加の負担が大きいという声が挙げられている。徳島大学における TPWS は，ティーチング・ポートフォリオの質保証を目的にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが作成した「TP 作成ワークショップ基準」[1]に準拠している。これにより，参加者が作成するティーチング・ポートフォリオは，我が国において質が保証されたものとして認められている。したがって，単純にワークショップの時間を短縮したり，作成期間を分割して実施することができないと言える。

近年では簡易版のティーチング・ポートフォリオを開発し，普及していこうとする動きが見られる。その 1 つに，ティーチング・ポートフォリオ・チャート（以下，TP チャート）を挙げることができる。TP チャートは，東京大学の栗田佳代子氏，吉田塁氏によって開発されたものであり，ワーク

表 4　授業参観・授業研究会による修了者

実施日	学部・学科等	氏名	授業名
7 月 13 日	総合科学部	甲田　宗良	産業・組織心理学
11 月 9 日	教養教育院	古屋　　玲	基礎物理学II・物理学概論
12 月 14 日	高等教育研究センター	畠　　一樹	ソーシャルデザイン：未来社会とキャリアの構想
2 月 8 日	理 工 学 部	川上　烈生	電子物理学

シートを活用して 2 時間程度で，具体的な実践から自身の教育に対する理念を明確にし，成果や課題，今後の目標を設定するものである [2)]。

徳島大学においても，2018 年度，2019 年度に「ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成 WS」を開催し，参加者からは授業の振り返りができたことや日常の取組を可視化できたという意見が挙げられ，有意義であったことが示されている。そこで，2021 年度は TPWS を開催せず，簡易版である TP チャートを作成するためのワークショップを開催することとした。

4.4.2　概要

徳島大学では，教員が授業実践を振り返り，評価，改善を行うことを支援するために，栗田佳代子・吉田塁・大野智久（2018）『教師のためのなりたい教師になれる本！』に紹介されている TP チャートを参考にして，授業実践に焦点を当てた「徳島大学版 TP チャート」（図 5，6）を作成するためのワークショップを実施した。この TP チャートの作成は，徳島大学が 2018 年度に策定している「教育の質保証に関する方針」（一般的にいうところのアセスメントポリシーにあたる）に掲げられている「科目担当教員は，それぞれの学位プログラムにおける担当科目の位置づけを理解し，意図する学習成果（到達目標）の達成状況及び，到達度を指標として自ら行う授業評価及び学生による授業評価結果に基づき，（中略）授業改善に努める」ことに関連すると位置付けている。

2021 年度に実施した「ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成 WS（以下，TP チャート作成 WS）」は，9 月 17 日に学内教員を対象に実施し，1 月 7 日に「第 17 回大学教育カンファレンス in 徳島」のワークショップとして，学外にも開放して実施した。両日程ともに新型コロナウイルス感染症の影響により Zoom を用いたオンラインでの開催となった。参加者は，それぞれ 7 名，12 名であった。

4.4.3　成果と課題

それぞれの TP チャート作成 WS において，ワークショップ終了時に参加者アンケートを実施した。アンケートの結果は，図 7 の通りである。この結果から，TP チャート作成 WS は，概ね肯定的な評価を得ていることが分かる。特に，「1. 自身の授業実践を振り返ることができた」，「5. 本ワークショップは今後の教育活動において有益なものであった」という設問では，最も肯定的な回答が 80％を超えている。また，参加してよかった点を記載する自由記述では，「自分の教育実践をふり返りつつ，どう対応するか考える機会になった」，「日々臨床に追われ，なかなか振り返りの機会がありませんので，大変良い機会を頂いたと思います」，「授業方法を振り返ることで，脳内にはあったであろう自身の教育理念を掘り出すことができた」などの意見が多数挙げられていた。このことから，TP チャート作成 WS は，日々の授業実践について，振り返る機会を提供し，今後の授業実践においても有益な気づきを与えていることが分かる。また，「7. 機会があればティーチング・ポート

図 5　徳島大学版 TP チャート

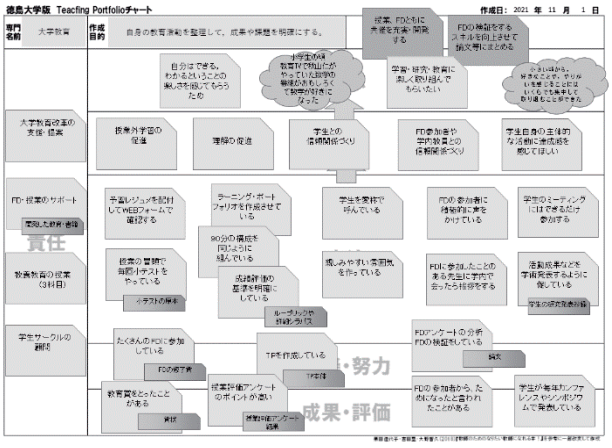

図 6　徳島大学版 TP チャート（サンプル）

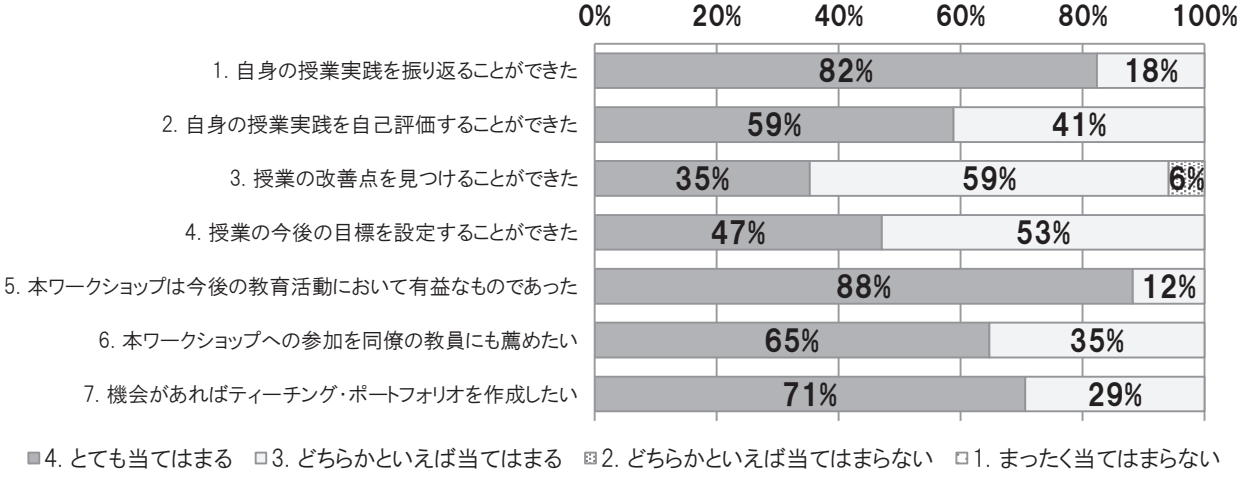

図 7　TP チャート作成 WS　参加者アンケート結果（n=17）

フォリオを作成したい」という設問では，71%が「とてもそう思う」と回答しており，自由記述においても「3 日間のワークショップも参加したいと思う」，「やろうと思いつつ，できないので，ポートフォリオを作りたいです」という意見があり，TP チャート作成 WS は，TPWS の参加につなげる役割を担っていることも分かる。2022 年度は，TPWS を開催する予定であるが，実際にどの程度の参加希望があるかについて注目していく必要がある。

一方で，1 月 7 日の大学教育カンファレンス in 徳島のワークショップとして実施した TP チャート作成 WS では，自由記述で，「ブレークアウトルームがもう少し長めで，改善点等をディスカッションできれば良かったと思います」，「時間が短かったので，あと 10 分でも時間があればよかったです」，「やはり時間が少し短かったですね。意見交換できるとよかったです。」のように，12 名中 7 名が参加者同士の意見交換の時間設定に関する改善点を挙げていた。実際，9 月 17 日は 2 時間でワークショップを実施したのに対し，1 月 7 日は 1 時間 30 分であった。これは，大学教育カンファレンス in 徳島のプログラムの時間配分に合わせたことが要因であるが，今後は，最低 2 時間は確保して実施する必要があることを再認識した。また，多くの参加者が，参加者同士の意見交換を必要としていることも分かった。個人で TP チャート作成に取組む時間と参加者同士の意見交換を行う時間などの時間配分についても再検討する必要があると感じる。

2021 年度は，2 回の TP チャート作成 WS を実施したが，簡易版であっても参加する教員は少ないのが現状である。教員がワークショップの内容や意義を理解できるように広報活動を行うことに加え，教員の教育業績に関する評価と関連させるなど，教員が教育実践を振り返るように，組織的な取組を行うことも重要であると考える。

（吉田　博）

5. 授業について考えるランチセミナー（すぐ使える 90 分セミナー）

5.1　目的

授業について考えるランチセミナー（すぐ使える 90 分セミナー）は，アクティブ・ラーニングや新しい教育技術，教育ツールを全学的に普及していくために，教職員，大学院生を対象に教授学習に関するテーマでミクロレベルの FD プログラムを計画的に実施するものである。また，当部門が実施する他の FD プログラムと連携し，実施したテーマもある。さらに，四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）の FD プログラムとして，SPOD 加盟校にも開放している。

2021 年度は新型コロナウイルス感染症対策と同時に，多くの教員が Zoom を利用しオンラインでのミーティングに参加できる環境を整備したことを受け，オンラインで気軽に参加でき，かつ有

益な情報を得られることを主目的に大きく実施体制を変更した。具体的には 2020 年度まで月 1 回，16 時 20 分から 90 分での実施であったものから，月 2 回，昼休みの 12 時 5 分から 50 分まで，同じテーマで異なる内容のセミナーを Zoom によるオンラインで実施することとした。それに伴い，名称も「授業について考えるランチセミナー」とした（図 8）。

5.2　概要

表 5 に示した通り，10 のテーマで計 20 回のセミナーをオンラインで実施し，延べ 563 名の教職員，大学院生，学部学生が参加した。

5.3　成果と課題

プログラム終了直後，参加者を対象にアンケートを実施し，延べ 207 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法のアンケート結果は図 9 の通りである。

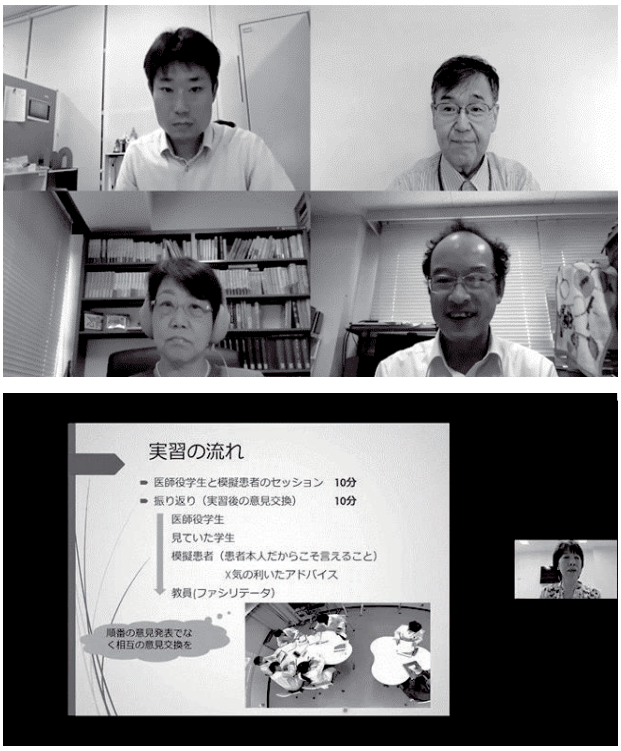

図 8　授業について考えるランチセミナーの様子

表 5　2021 年度授業について考えるランチセミナー実施状況

	テーマ	講師	実施日	参加者数
1	オンライン授業・ハイブリッド授業	吉田　博（高等教育研究センター）	4 月 8 日	43 名
			4 月 15 日	38 名
2	オンライン環境での学習評価	飯尾　健（高等教育研究センター）	5 月 13 日	39 名
			5 月 20 日	32 名
3	学生の主体性を促す学習支援	竹中　喜一（愛媛大学教育･学生支援機構教育企画室）	6 月 10 日	32 名
			6 月 17 日	29 名
4	ルーブリック作成入門	飯尾　健（高等教育研究センター）	7 月 8 日	26 名
			7 月 15 日	26 名
5	TA･RA の活用	佐藤　万知（京都大学高等教育研究開発推進センター）	9 月 9 日	13 名
		飯尾　健（高等教育研究センター）	9 月 16 日	19 名
6	学生とのコミュニケーション	吉田　博（高等教育研究センター）	10 月 14 日	33 名
			10 月 21 日	31 名
7	オンライン環境でのアクティブラーニング	吉田　博（高等教育研究センター）	11 月 11 日	30 名
			11 月 18 日	26 名
8	シラバスの作成	塩川　奈々美（高等教育研究センター）	12 月 9 日	27 名
			12 月 16 日	19 名
9	学習のエビデンス収集･分析 1（量的分析編）	塩川　奈々美（高等教育研究センター）	1 月 13 日	31 名
			1 月 20 日	15 名
10	学習のエビデンス収集･分析 2（質的分析編）	塩川　奈々美（高等教育研究センター）	2 月 10 日	19 名
			2 月 17 日	35 名

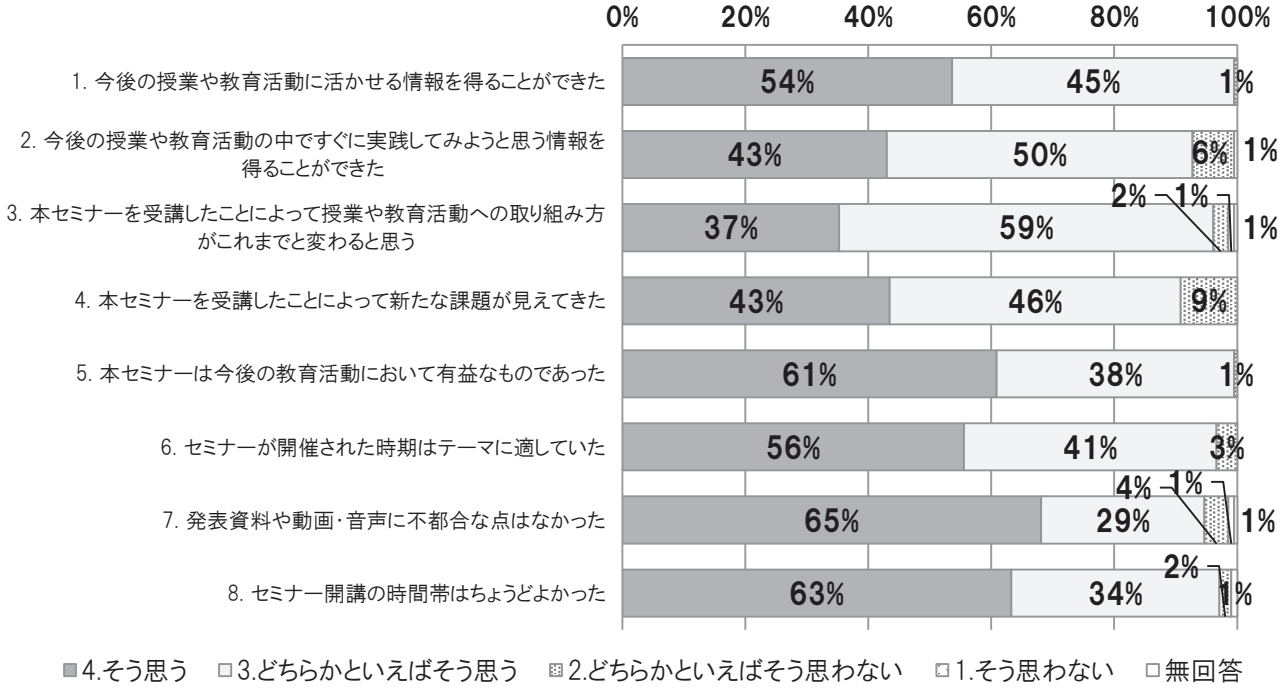

図 9　授業について考えるランチセミナーアンケート結果（n=207）

アンケートの結果から,「今後の授業や教育活動に活かせる情報を得ることができた」,「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」をはじめ,いずれの設問でも「とても当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた肯定的な回答が 90%を超えている。このことから,本セミナーは参加者にとって有益であったことが示唆される。同時にアンケートでの本セミナーに参加して良かった点・有益であった点を自由記述式で問う設問では,「授業設計で参考になるものがあった」「オンライン授業で役立つツールの情報を入手することができた」といった意見のほか,「実践例を交えて分かりやすい内容であった」「学生の生の声を聞くことができた」といった回答も見られた。これは，本セミナーがオンラインでの実施となったことに伴い，オンライン授業に焦点を当てた内容を実施したことに加え，学生や学内外の登壇者を招きやすくなり，実際に授業で教員が行っている工夫等を積極的にセミナーで紹介したことによるものと言える。

また，本セミナーはオンラインでの実施に加えSPOD 加盟校への開放も行った。それにより学外からも多数の教職員が参加し，延べ参加者のおよそ 24%が，徳島大学外からであった。

このように，今年度は本格的にオンライン開催に踏み切り，合わせて実施時間帯等を変えたことにより，より気軽に，多くの教職員が参加できるようになったと言える。

一方で今後の課題としては,「気軽に参加できる」ことを主目的にした結果，参加者による積極的な質問や議論がやや少なかったことがまず挙げられる。これには，参加者が回答しやすい問いかけや議論の時間を増やすなど，参加者をセミナーに関与させる仕組みづくりが必要である。また，テーマによっては参加者が少ないものも多く，参加者のニーズを適切に把握したテーマ設定も必要である。さらに，現在本セミナーの模様は録画し，YouTube 上で限定公開しているが，これらのアーカイブ動画をどのように有効活用するかについても検討が必要である。　　（飯尾　健）

6. SIH 道場担当者 FD

SIH 道場授業担当者が SIH 道場の設置背景となる大学教育再生加速プログラムの概要や自身が担当する SIH 道場の詳細について理解を深め，SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を修得するために，「2021 年度 SIH 道場授業担当者 FD」を開催した。

SIH 道場とは，本学で開講する全学初年次教育プログラム「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を指す。本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育再生加速プログラム（テーマI : アクティブ・ラーニング）」の取組として 2015 年度から導入された。全学 1 単位必修の科目であるが，内容はそれぞれ専門分野毎に異なり，i : 専門分野の早期体験，ii : ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得，iii : 学修の振り返り，これら 3 つの目標が共通する授業設計項目として設定されている。

授業担当者は原則として年度ごとに交代することになっているため，補助金期間中における本 FD は毎年度実施し，義務に近い形での参加を呼びかけてきた。2020 年度より，SIH 道場のマネジメントは完全に SIH 道場の実施単位である各学部学科等に委ねられたため，本 FD への参加も完全に任意となるが，部局独自の SIH 道場実施に向けた授業担当者への情報共有の場としても重要な意味合いを持つ。本節では，こうした位置づけである「2021 年度 SIH 道場担当者 FD」の実施概要を報告する。

6.1　目的

本 FD の狙いは，授業設計コーディネーター，SIH 道場授業担当者が SIH 道場の概要を把握するとともに，SIH 道場で役立つ教育手法やそのツールについて学ぶ機会を提供することにある。今年度のプログラムでは，参加者に SIH 道場の理念や授業設計における必須項目について解説し，授業設計コーディネーターや授業担当者の役割を確認したほか，学習の振り返りに有効となる e ポートフォリオに関する説明や活用事例の紹介，学生の学修を促す授業設計についての解説を行うことで，SIH 道場の円滑な実施・運営の支援を目指した。本 FD の目標は次の 3 つである。

① SIH 道場授業担当者が当該学科の SIH 道場の背景やその詳細について理解し，SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。

② SIH 道場が OJT（On the Job Training）型の FD であることや授業実施から振り返りまでのプロセスについて理解する。

③ 前年度の実施内容を情報共有し，振り返ることで，with コロナ時代を見据えた SIH 道場の実施を検討し，今年度実施に向けた計画の見通しをもつ。

6.2　概要

■開催日・会場

日時 : 2021 年 3 月 11 日（木）16:30-17:50

会場 : オンライン（Zoom）

新型コロナウイルス感染症対策のため，2021 年度も Zoom を利用したオンライン形式での実施とした。

■参加者

今年度の参加者は，常三島キャンパスならびに蔵本キャンパスの教職員 39 名である。

■運営メンバー

運営メンバーは，高等教育研究センター教育改革推進部門を含め，詳細は次の通りである。

氏　名	所　属	職 名
吉田　博	教育改革推進部門	部門長・准教授
飯尾　健	教育改革推進部門	助　教
塩川奈々美	教育の質保証支援室	助　教
金西　計英	学修支援部門 EdTech 推進班	教　授
高橋　暁子	学修支援部門 EdTech 推進班	准教授

■内容・全体の流れ（表 6）

「SIH 道場の概要」では，SIH 道場の目標，内容，実施体制，授業設計の必須項目について解説を行い，参考情報として，前年度の取組内容や 2021 年度実施に向けての課題についての情報共有がなされた。また，高等教育研究センター各部門による支援や提供される教材（テキスト・動画教材など）について説明した。さらに，SIH 道場の改善に向けた評価として，学生アンケートや教員アンケー

表 6　2021 年度　SIH 道場授業担当者 FD

時間	内　容	詳　細　項　目	担当者
25分	SIH道場の概要	①目的・概要 ②スケジュール（設計→実施→振り返り） ③2020年度の実施事例紹介	塩川奈々美
5分		休　憩	
20分	教務システムにおける eポートフォリオ	①システムの概要 ②eポートフォリオの活用	金西　計英 高橋　暁子
5分		休　憩	
25分	学生の学習を促す授業設計	①オンライン授業での成績評価・出席確認 ②オンライン授業における双方向性の確保	吉田　博 飯尾　健

トの各種アンケートの結果や「2020 年度 SIH 道場の実施に関する実態調査」の結果について情報共有を行った。

「教務システムにおける e ポートフォリオ」では，振り返りの意義やポートフォリオの考え方について整理を行った上で, e ポートフォリオの活用にむけての紹介がなされた。本学では教務システムに学生の学修成果が可視化されるシステムが構築されているほか，LMS（Learning Management System）を用いた e ポートフォリオ作成機能が利用できる環境にある。教育指導の現場において学生自身が自らの学びを振り返り，その後の学習に活かす習慣が身に付くよう，教員側も学生に学習の振り返りの機会を提供し，適宜フィードバックを行うような体制が求められている。

「学生の学習を促す授業設計」では，オンライン授業における出席確認の方法ならびに成績評価方法，オンライン授業における双方向性の確保に関する解説が行われた。2021 年度も新型コロナウイルス感染症対策が求められる中での SIH 道場の実施が想定されたため，オンライン授業の環境下においていかに授業を実施するか，またどのようにして成績評価を適切に行うかを悩む教員も少なくない。さらに，オンライン授業における双方向性の確保については様々な工夫を提供することで，授業担当者に実施の在り方について検討してもらうよう促した。

6.3　アンケート結果

FD 終了後に研修内容に関するアンケート調査を実施した（図 10，回収率は 68.6%（n=24））。

6.4　成果と課題

アンケート回答者のうち，参加者の職種は「教員（SIH 道場授業担当者）」は 62.5%,「教員（授業設計コーディネーター）」は 37.5%であった。例年開催している本 FD への参加経験については過半数の 54.2%が「以前参加したことがある」と回答しており，45.8%が「今年度が初めての参加」と回答した。

SIH 道場担当者 FD について質問した結果,「SIH 道場の目的の理解」や,「学生の到達目標に関する理解」「オンライン授業での成績評価・出席確認の方法や効果に関する理解」「オンライン授業における双方向性の確保への理解」「本 FD の全体的な満足度」に対する肯定的意見は 90%以上であった。「教務システムの活用方法に関する理解」についても，87.5%の参加者が理解できたと回答した。

本 FD に関する自由記述を見ると，

- SIH 道場のみならず，通常の講義にも適用できそうな内容もあり，有意義でした。
- （オンライン授業における双方向性の確保についての内容は）有意義であった。
- 教務システムにおける学生の達成度チェックのシステムについては，大変有意義と思います。遅れているとのことですが早期の運用開始を願っています。

（下線は筆者による。以下同じく。）

など, FD の内容や紹介した情報について満足いただけた声がうかがえた。SIH 道場の業務に関する

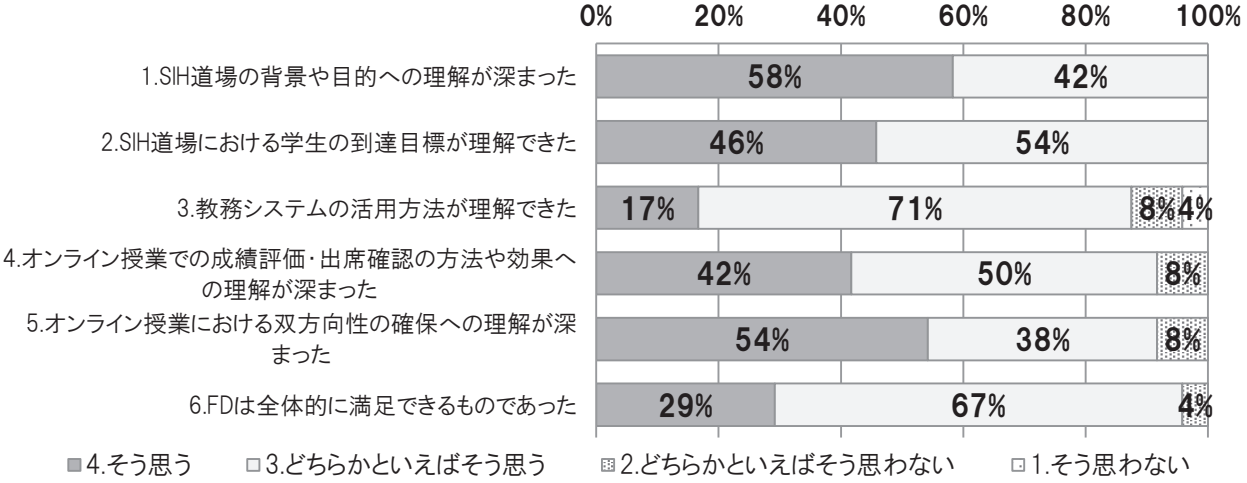

図 10　2021 年度 SIH 道場 FD アンケート結果（n =24）

FD として，SIH 道場の運営に必要な情報を共有することができたと言える。一方で，本 FD の開催時期についてはもっと早期に実施するべきとするご意見をいただいた。

- SIH 道場のコーディネーターとして，参加しました。来年度のシラバス作成等の時期を考えますと，もう少し早い段階（1 月頃）に開催していただくと，シラバス等作成に，今回の講習内容が生かせたように思います。

補助金期間中においては，授業設計を担当する授業設計コーディネーターのみを対象とした参加義務を伴う FD「SIH 道場キックオフミーティング」と，授業設計コーディネーターとともに授業を担当する授業担当者を交えた参加任意の「SIH 道場授業担当者 FD」という 2 種類の FD の機会が設けられていた。補助金期間終了に伴い，SIH 道場の運営が各部局に委ねられたことで，授業設計コーディネーターと授業担当者が任意に参加する「SIH 道場授業担当者 FD」のみが継続する形となったが，授業設計を担当する授業設計コーディネーターに本 FD で提供される情報を活用いただけるよう 2023 年度以降の計画において前向きに検討していきたい。

2021 年度の SIH 道場は新型コロナウイルス感染症対策のためにほとんどのプログラムにおいてオンラインで実施される形となった。オンラインへの適用が可能な内容が検討されるものの，SIH 道場の授業設計において必須項目の一つとなっている「専門分野の早期体験」においては従来の SIH 道場では現場見学や体験学習等が盛り込まれていたため，これをオンラインの環境下で実現することは難しい状況にある。こうした授業設計の実施方法について情報収集を行い，学部等部局に情報提供できるよう対応を検討していきたい。

（塩川奈々美）

7. 大学で教える仕事に携わる大学院生のためのプレＦＤ

7.1　目的・背景

大学院博士（後期）課程の学生は，修了後に大学教員となる場合や，大学教員とならない場合であっても，将来的に身につけた高度な専門知識や技術を他者へ教授する機会が生じる可能性が高い。また，大学院生としての日常においても，研究室で修士課程の学生や卒業研究生に対する指導的立場になることや，ティーチングアシスタント（TA）やリサーチアシスタント（RA）として教員と共に後輩の学習指導に当たる機会もある。このような状況から，大学院設置基準が一部改正され，2019 年度より博士（後期）課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務とされた。

徳島大学全学 FD 推進プログラムでは，2020 年度より，大学で教育に携わる博士（後期）課程の大学院生を対象にプレ FD プログラムを実施している。2021 年度は，Zoom によるオンラインで，以下の 3 つの内容のプログラムを実施した。

7.2　概要

■TA の役割・業務に関する情報提供，意見交換
日時：9 月 9 日（木）12：05〜12：40
　　9 月 16 日（木）12：05〜12：40
参加者数：3 名
内容：大学で TA として，教育業務に従事するために必要な知識，日本やアメリカの大学における TA 制度，TA の役割，業務，心得などを紹介する。当日は，TA を雇用する教員にも参加してもらい，大学院生，教員の両者が TA 業務に関わる理解を深める。なお，同時刻に実施する，授業について考えるランチセミナーと合同開催する。

■日常の教育活動に関する振り返りと今後の目標
日時：9 月 17 日（金）13：30〜15：30
参加者数：0 名
内容：日常の教育活動を振り返り，具体的な取組から自身の教育に対する理念を明確にし，成果や課題，今後の目標を設定するための，TP チャートを作成する。これまでの教育実践を整理することができ，これからの教育活動や将来に向けた具体的な方針や行動を明確にする。なお，同時刻に実施する，教員を対象とした TP チャート作成 WS と合同開催する。

■高等教育政策に関する情報提供，意見交換
日時：4 月 26 日〜7 月 12 日の月曜日 11 日
　　10 月 18 日〜1 月 17 日の月曜日 11 日
　　各日程 10：25〜11：55
参加者数：1 名
内容：近年の高等教育政策について，毎回 1 つの政策（テーマ）を取り上げ，日本の大学や徳島大学における取組の現状や課題について多様な参加者とディスカッションを行う。参加者は事前に提供する資料をもとに学習をしたうえでプログラムに参加する。なお，同時刻に実施する，徳島大学教養教育科目「大学教育と自身の学びを再考する」と合同で実施する。

7.3　成果と今後の課題

これまで徳島大学では，大学院生向けの FD プログラムとして，2018 年度に「TA を対象にした授業支援研修会」を実施し，2019 年度からは「すぐ使える 90 分セミナー」を大学院生に対象に加えて実施してきた。2020 年度からは，徳島大学全学 FD 推進プログラムにおいて，プレ FD プログラムを実施し，2021 年度は実施 2 年目にあたる。

2020 年度は，90 分間のプログラム 1 回で，高等教育政策，TA の役割・業務に関する情報提供を行い，参加者の教育活動における現状や課題について意見効果を実施し，参加者数は 6 名であった。2021 年度は，大学院生の個別のニーズに対応できるように，3 つの内容でプログラムを分けて実施したが，参加者数は 2020 年度よりも減少した。2021 年度の各プログラムは，大学教職員を対象に実施している FD プログラムや授業と，同日程で開催し，参加者相互の学びにつながるように設計した。これらのプレ FD プログラムは，日程は他の研修等と同じであったが，プレ FD プログラムとして案内し，大学院生が参加する目的や意義を明確にして参加者募集を行った。しかし，プレ FD プログラムとしての参加者数は少なく，広報面，内容面共に課題が残る結果となった。徳島大学では，博士後期課程の大学院生が修了後に大学等の高等教育機関で教員となるケースは少なく，プレ FD プログラムとしての大学院生のニーズを十分に把握できていない。2022 年度もプレ FD プログラムを実施する計画となっているが，しばらくは手探りの中で試行的なプログラムの提供を行うこととなる。徳島大学において大学院生の指導を担当している学部教員との意見交換を行うなど，徳島大学の大学院生のニーズに合わせたプログラム開発を進める必要がある。また，2022 年度からは，四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）における FD 専門部会において，プレ FD プログラムの共同開発が検討される予定である。四国地区のコア校（愛媛大学，香川大学，高知大学，徳島大学）においても，同じような状況であると考えられることから，これらの大学の担当者と協働してプログラム開発を行うことにも意義があると考える。

（吉田　博）

8. 大学教育カンファレンス in 徳島

8.1　目的

大学教育カンファレンス in 徳島は，教育実践や FD 活動の成果を検証し，高等教育における実践研究の取組や人的ネットワークを充実・発展させることを目的としている。本学や他の高等教育機関で行なわれている教育実践の先駆的な取組を共有し，大学教育の質的向上に向けた成果を確認するものである。2005 年度から実施しており，今回で 17 回目となる。2021 年度も，2020 年度に引き続き，新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い，Zoom によるオンラインで実施した。

8.2　概要と成果

■開催日時

2022 年 1 月 7 日（金）9:00～17:50

■会場

Zoom（オンライン）

■概要

全体の参加者は学外からの参加者 57 名を含む，215 名であり，これまでで最も多い参加者数となった。研究発表の件数は，口頭発表 16 件，ポスター発表 12 件，ワークショップが 2 件であり，特別講演が 1 件行われた（表 7）。

2021 年度も当初は対面形式のカンファレンスを計画していたが，新型コロナウイルス感染症拡大に伴い，Zoom を活用したオンライン形式により実施した。口頭発表，ポスター発表では，1 つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して，発表会場またはポスターごとにルームを設置し，参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。2020 年度のオンラインによる運営の経験を踏まえ，ポスター発表の際は，原則参加者はカメラをオンすることや，各ポスターに会場係を設置するなど，運営面で昨年度のアンケートで指摘された事項を改善して実施した。ワークショップでは，それぞれの異なるアカウントにおいて実施し，ブレイクアウトルームを活用したグループセッションや参加者同士のコミュニケーションがとられていた。特別講演は，大阪大学サイバーメディアセンター教授の岩居弘樹氏による「オンライン授業のこれまでとこれから」と題した講演が行われた。オンライン授業において，学生と教員，学生同士の双方向性を高めるための工夫や，web 上のアプリの紹介もあり，参加者がオンライン授業を実施するうえで活用することができる情報を得ることができた。

8.3　カンファレンスの成果と今後の課題

2021 年度は，オンラインによるカンファレンスの実施は 2 年目であり，2020 年度の実施によって明らかになった課題に対応して運営することができた。また，他の学会や研究会もオンラインで開催されており，運営スタッフ，参加者ともにオンラインで開催するカンファレンスへの参加に対する慣れもあり，Zoom へのアクセスやブレイクアウトルーム間の移動に関する操作の不安も 2020 年度と比べて減少していると感じた。実際に，Zoom の操作に関する問い合わせや相談は 1 件もなかった。また，参加者数は 215 名と過去最高であり，特に学内の参加者数が大幅に増加した。これは，オンラインでの開催となったことや，年末年始の開催間近のタイミングで学内外への周知回数を増やしたことが参加者の増加につながったと考える。

カンファレンスでは，参加者を対象にカンファレンス終了後に web によるアンケートを実施しており，109 名から回答を得た（回収率 51%）。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 11，12 に示している。「a.自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」と「b.参加したことによって業務の取り組み方が改善されると思う」，「c.カンファレンスの内容を十分に理解できた」という設問について，「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が約 90%であり，2020 年度に引き続き肯定的な回答を得ている。これは，多くの参加者がカンファレンスの目的や意義を理解し，自身の能力向開発を感じて参加したうえで，カンファレンスの内容がそれに資するものであったことを示唆している。「d.他の参加者との交流を深めることができた」では，「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者は半数にも満たなかった。これはオンラインで実施されたことにより，他者とのコミュニケーションが容易ではないことを示している。ただ，図 11

表 7　第 17 回 大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

8：30 ～ 9：00	受　付		
9：00 ～ 9：10	*学長挨拶　野地　澄晴* *司会：吉田　博*		
9：15～ 10：15	***研究発表Ⅰ（口頭発表）***		
	口頭発表A *座長：日野出 大輔* 〈A会場〉 A① 9：15～9：35 ■大学生の主体的な学びへのメタ認知の影響についての検討 高等教育研究センター 金西　計英	***口頭発表B*** *座長：友竹　正人* 〈B会場〉 B① 9：15～9：35 ■PBL 型科目におけるコンセプトマップを用いた評価の試み ―心筋梗塞の啓発ポスター作成から学生は何を学んだか？― 四国大学　看護学部 大串　晃弘　他	***口頭発表C*** *座長：松木　均* 〈C会場〉 C① 9：15～9：35 ■徳島大学附属図書館の学習支援と学生協働 ～With コロナ時代の取り組み～ 学術情報部 佐々木　奈三江　他
	A② 9：35～9：55 ■実践的な能力開発を考慮した新規授業の開設における創意工夫 高等教育研究センター 畠　一樹	B② 9：35～9：55 ■オンラインホワイトボードを活用した「デザイン思考 WS」の開発 ―理工学部授業「参加型デザイン」での実践報告および考察― 人と地域共創センター 森田　椋也	C② 9：35～9：55 ■シンガポールの大学との PBL 型国際共修 ～地元企業と連携したオンラインによるグローバル教育実践～ 高等教育研究センター 清藤　隆春　他
	A③ 9：55～10：15 ■自律英語学習を促進するための自己評価用紙の作成について 高等教育研究センター 坂田　浩	B③ 9：55～10：15 ■医療事務職場の実態と短大卒求人確保の対策について ～徳島県内の医療機関訪問報告～ 四国大学　短期大学部 蔵谷　哲也	
10：15～ 10：30	休　憩		
10：30～ 12：00	***ワークショップA*** ＜A会場＞ ◆オンラインでインプロを体験してみよう！ ―演劇的知を教育実践に― 教養教育院 Gehrtz 三隅友子　他	***ワークショップB*** ＜B会場＞ ◆徳島大学版ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ 高等教育研究センター 吉田　博	

12：00～ 13：00	休　憩	
13：00～ 13：30	***ポスター発表（第Ⅰ部）***　＜開催場所：A会場＞ *座長：吉田　博* P① ソーラーカープロジェクト 7 年の活動成果報告 理工学部情報光システムコース 2 年　長濱 一輝　他 P② AI/IoT オリジナル教材を用いた実験・演習プログラムの開発 技術支援部　辻　明典　他 P③ 材料利用の効率化から生み出される生産力向上方法の考察 高等教育研究センター　亀井　克一郎　他 P④ Building Resilience for International Students: Results of Stress Prevention Seminars 留学生レジリエンスの向上：ストレス対策セミナーでの結果 高等教育研究センター　チャン　ホアンナム　他 P⑤ オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析 ～BEVI を用いた測定結果に基づいて～ 高等教育研究センター　清藤　隆春　他 P⑥ 教養教育科目における言語地図作成の試み 高等教育研究センター　塩川　奈々美	
13：30～ 14：00	***ポスター発表（第 2 部）***　＜開催場所：A会場＞ *座長：吉田　博* P⑦ 歯科補綴学授業におけるアクティブラーニングの学修効果 ―オンライン授業と通常授業、TBL 授業の比較― 大学院医歯薬学研究部　大倉　一夫　他 P⑧ COVID-19 対策が日常となった 2021 年度歯科補綴学実習の評価 大学院医歯薬学研究部　細木　眞紀　他 P⑨ コロナ禍におけるオンラインでの活動と新入生育成 理工学部情報光システムコース 2 年　野上　順平　他 P⑩ オンキャンパス型インターンシップによる遠隔地域との域学連携の試み：長崎県対馬市を対象に 人と地域共創センター　川崎　修良 P⑪ キャリア教育における自己理解に関連する意識調査結果の考察 高等教育研究センター　畠　一樹　他 P⑫ 看護学生を対象としたスポーツ救護ボランティア研修の試み ―学生アンケートを用いた研修プログラムの改善― 四国大学　看護学部　大串　晃弘　他	
14：00～ 14：15	休　憩	

14：15～ 15：35	***研究発表Ⅱ（口頭発表）***	
	口頭発表A *座長：桑原　恵* 〈A会場〉 A④ 14：15～14：35 ■動画視聴形式のオンデマンド型授業におけるコミュニケーション 教養教育院 南川　慶二	***口頭発表B*** *座長：常山　幸一* 〈B会場〉 B④ 14：15～14：35 ■徳島大学のオンライン英語授業におけるアクティブ・ラーニングの実践例と考察 教養教育院 内山　八郎　他
	A⑤ 14：35～14：55 ■問題変形作問に着目したイノベーションの基礎力および個人内創造性を育成する方法の提案 高等教育研究センター 福井　昌則	B⑤ 14：35～14：55 ■産学連携事業「ハイブリッドロケットエンジン開発・運用」実施報告 理工学部 情報光システムコース 3 年 松尾　泰成　他
	A⑥ 14：55～15：15 ■医療系専門職連携教育におけるオンラインワークショップの試み 大学院医歯薬学研究部 長宗　雅美　他	B⑥ 14：55～15：15 ■鳥人間プロジェクトの活動を通して得られた成果とチームマネジメントの課題 理工学部 電気電子システムコース 3 年 笹本　晴聖　他
	A⑦ 15：15～15：35 ■2 年目を迎えたコロナ時代における ZOOM における遠隔授業のあり方 ―1 年生必修キャリアプラン入門を事例として― 大学院社会産業理工学研究部 矢部　拓也　他	B⑦ 15：15～15：35 ■一般選抜後期日程における入学辞退率改善の取り組み ―徳島大学 B 学部の事例から― 高等教育研究センター 植野　美彦　他
15：35～ 15：50	休　憩	
15：50～ 17：50	***特別講演*** 演題：オンライン授業のこれまでとこれから 講師：岩居　弘樹　先生（大阪大学　サイバーメディアセンター　教授） *司会：吉田　博*	

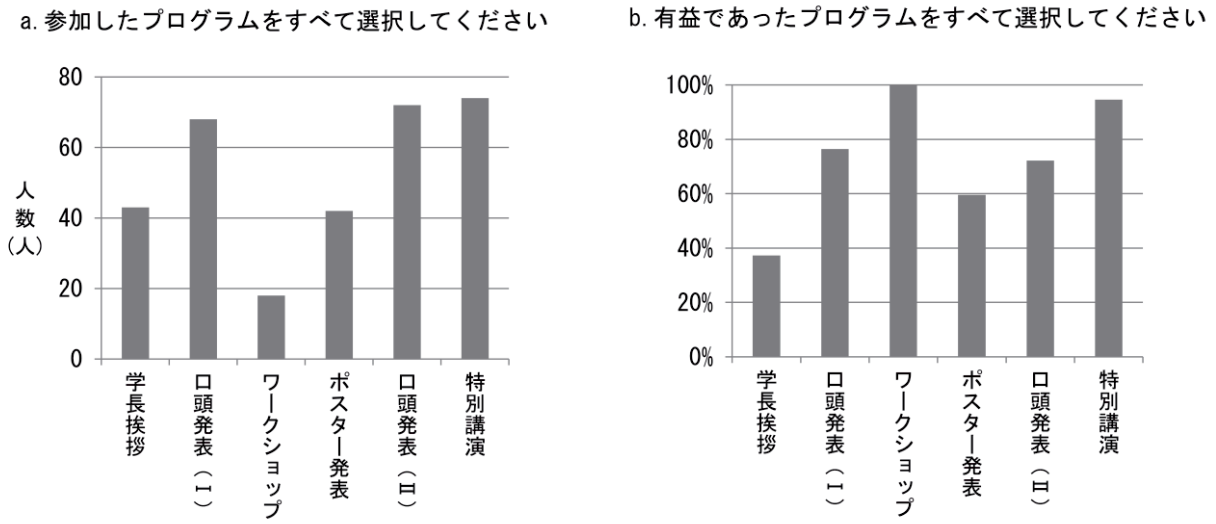

図 11　第 17 回大学教育カンファレンス in 徳島で参加したプログラムについて

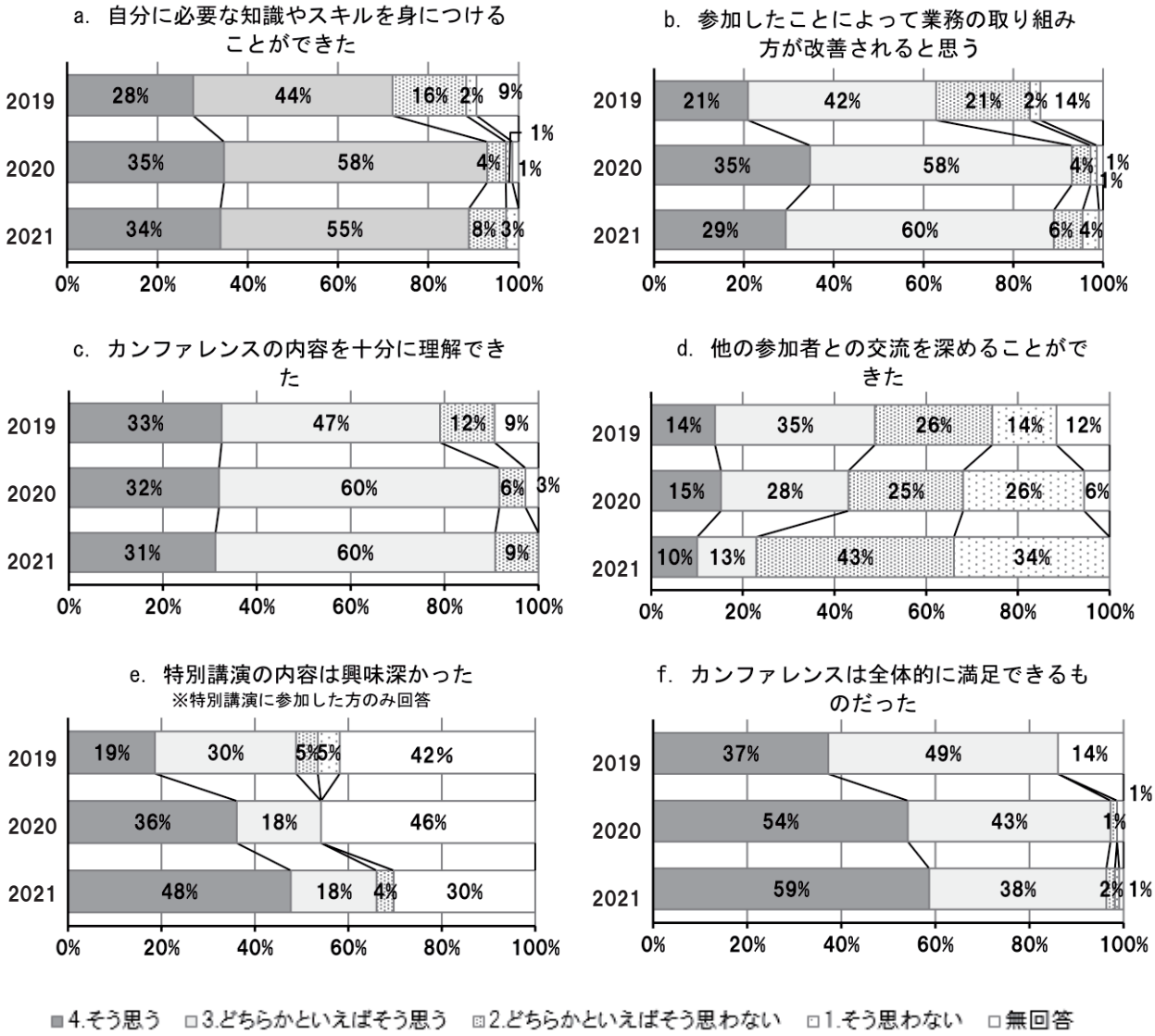

図 12　大学教育カンファレンス in 徳島アンケート結果（過去 3 か年分）

「b.有益だったプログラムをすべて選択してください」において，ワークショップを有益であったと回答した割合が 100％であったことと，両ワークショップの内容がオンライン上での対話や交流であったことから，参加者同士の効果的なコミュニケーションにより交流を深めることが可能なプログラムもあることが分かる。「e.特別講演の内容は興味深かった」という設問においても，「そう思う」と回答した割合は年々増加しており，自由記述では「特別講演で，授業等で使用できそうであり，かつ効果的でありそうな様々なソフトを紹介して頂いた点が有益でした」，「岩居先生のものすごい知識･情報量や経験値など，身近にはおられない素晴らしい先生からの情報や動機付けをいただくことができ，リモートで参加できるメリットを強く感じました」など，特別講演について良かったという意見が多く挙げられていた。テーマ設定がコロナ禍の現状に合っていたことや，参加者の授業で活用できる具体的な事例を提供できたことが肯定的な回答につながっていると考える。「f.カンファレンスは全体的に満足できるものだった」とういう設問でも 97％が肯定的な回答をしており，多くの参加者にとって満足できるカンファレンスであったものと推察できる。

一方で，課題としては，オンラインでの運営に関する意見が挙げられた。主には，口頭発表の会場運営や議論が活性化していないことへの対応である。2020 年度に課題として挙げられていた，参加者への案内，掲示，ブレイクアウトルームの設定，音声の問題などは改善されていたが，新たな課題が示されていると言える。これらの課題については，次年度の運営において改善する必要があり，未経験であったオンラインでのカンファンレンス運営において，挙げられた改善点に対応していくことで，今後は参加者にとってより快適な運営ができるようになると考えている。また，研究発表の申込者数が多い方が，全体の参加者数や満足度にも影響を与えていることから，研究発表の申し込みを促すような広報を引き続き検討していく必要がある。　（吉田　博）

参考文献

1) 大学評価・学位授与機構，2014，「ティーチング・ポートフォリオの定着・普及に向けた取り組み―効果検証・質保証・広がり―」，https://www.niad.ac.jp/n_shuppan/project/__icsFiles/afieldfile/2014/07/07/no9_20140707TP.pdf,（最終アクセス日：2022 年 2 月 10 日）.
2) 栗田佳代子・吉田塁・大野智久（2018）『教師のためのなりたい教師になれる本！』，学陽書房.